ず、犍陀羅特有の石で出て來る。犍陀羅に於ける青片岩は、恰もギリシアに於ける大理石の如きものなのである。

之で地理的穿索は終つたと考へられるのであつて、爾後、印度西北地圖でギリシア風佛教派の兩極限を、西北はカーピシーに、東南はタクシャシラーTakshasilā に決めて差支ない。斯くて此の流派の作品を見た地は、舊道に沿うて、カピシャ、ランパカ Lampaka (ラムガン Lamghan)、ナガラハーラ Nagarahāra (チエララバード Djelalabād)、ガンダーラ、ウデァーナ Udyāna (スワート Swāt 及びブネール Bounēr) に亙り、インダス河の左岸にまで及んだのである。然しながら、原始の發生地は、此の地方の重心とも、又眞に印度の控の間といつても不可なき所であつたに相違ないのであつて、此の犍陀羅の原野は、常に、農業商業上富んでゐると共に、考古學の見地からも富んでゐる。此の事實を論證するのは、最近のアフガニスタンに於ける考古學的踏査の最も重要な結果の一である。

三